

翌日も抜けるような青空で、目に見えるものの全ての輪郭が美しい光を帯びていた。

四人は日の出と共に起き、早めに朝食を取った。必要な荷物をまとめて家を出たのは、太陽がまだ天頂に昇るずいぶん前。

「よし、じゃあ行こうぜ！」

ネックが言って、一行はアリーベの村から北にある馬車の停車場へ向けて歩き出した。

「わあ……！」

丘の上から、真っ青な空の下に広がる緑の村の風景を見て、ノアは声を上げた。

「きれい……！」

「どうしたの？」

「きれい。すっごく、すっごく……！」

ノアは子どものように瞳を輝かせた。どこまでも明るい彼女の表情に、三人も村を見下ろした。

「ずっと暮らしていると当たり前に感じる景色も、こうやって見ると確かに綺麗かも」

ネック、ノラン、リアムは小さく微笑んだ。

一行は村の途中でお代を払って馴染みの顔に馬車を出してもらった。木造りの小さな馬車だが、一行と一泊分の荷物を載せるには十分である。ノアは不思議そうに馬を見ていた。

「触らせてもらうか？」

ネックは馬の顎を撫でた。馬は気持ちよさそうに目を細める。それを見て、ノアは安心したように頷き、馬車に乗り込んだ。

マーデル・プラッタまで、ここから二時間半。馬のために休憩もするから、到着は昼ごろになるだろう。

外の座席にいる御者が手綱を引くと、のんびりと馬車が進み始めた。

道が悪いのでまあまあ揺れる。小刻みに揺られる中、

「市場楽しみだな～！ 綺麗なお姉さんいねえかな？」

「もう、ノランはいつもそう。今回は宿とったほうが良いよね？」

「よし、じゃあ宿とる組と市場組で手分けしようぜ」

ノアが三人の会話を聞きながら外の景色を見ていると、

「ノアは市場見るか？」

ネックの問いかけに、ノアはこくりと頷き――。

そして、自分の胸が、ざわざわしていることを自覚した。

どうしてそんな気持ちになるのか――ノアには、まだわからない。

その感情を説明するだけの言葉を、この時点でまだノアは持っていなかった。

だから、

「……うん」

ノアはネックに、せめてもと微笑みを返した。

「へへっ」

そう言って自分も微笑んでくれるネックに、ノアの胸はまたざわざわする。

街道はやがて、森の小道へと繋がる。

ここに来て、青空に重い雲がかかり始めた。高い木々によって陽の光が遮られ、曇天も相まって辺りはより薄暗くなる。木々を抜けて吹く風は湿っていて、空は今にも雨を降らせそうだ。

馬車は歩調を上げて、早々に森を抜けにかかった。

「なんだか不気味……」

リアムが呟いた。

「いつ来ても、この森は慣れないなあ……」

鬱蒼とする木々の葉が擦れる音は、まるで幾十人、幾百人もの人間が何事かを囁いているように聞こえる。

ノアが、不安そうな視線を空へ向ける。

天を覆う高い木々の枝によって、空はわずかに覗くばかりだ。

「大丈夫だよ」

ノアの表情から怯えを察したりアムが、

「みんなついてるからね」

ノアの背を優しく撫でた。

ノアは、リアムの手の温かさで幾ばくか安心する。

「――お！」

森に行くこと十数分。

ふと、ノランが前方を指差した。

「ようやっと出口だ！」

光が満ちているわけではないが、ノランの指差す先はこの森の小道に比べて確かに数倍は明るかった。

――ばきばきばきばき。

どこかで木の折れる激しい音が木霊してきたのは、ノランが言ったその時だった。

「！」

その音にまっさきに反応したのは、ネックだ。

明らかに自然のものではない音。

何か木を「へし折った」ような音。

一行のすぐ後ろ、草木の茂みが、ざわざわざわと揺れた。

馬の足が止まる。

御者が「なんですか？」と後ろを向き、

「警戒しろ！！」

ネックは叫び、立ち上がった。